



9月22日(金)マサチューセッツ州南東部のフェアヘイヴンに向かいました。ここは日本では誰でもその名を知る「ジョン万次郎」(1827 - 1898) ゆかりの地です。彼は漁師となり、14歳の時、難破し、無人島の鳥島で、捕鯨船々長ホイットフィールド氏(1804 - 1886)に救助されました。



ホイットフィールド氏は、万次郎に捕鯨を教え、彼の真面目さ、積極性、胆力を見込んで、ご自身の故郷のフェアヘイヴンに伴い、教育を受けるチャンスを与えました。万次郎は帰国後に、日本の開国に関して、多大な貢献をしています。

船長の家は現在は「ホイットフィールド万次郎友好の家」になっています。市沢氏が予約してくださり、開館日ではないのに関わらず、ボランティア活動に燃えておられる87歳の、「家」の協会理事長のルーニー氏が、特別にガイドをして下さいました。氏の御夫人は日本女性とのことで、彼は日本語がお上手です。私たちをフェアヘイヴンの非常に美しいミリセント図書館で出迎えて下さいました。図書館には万次郎関連の様々な記念の品物が保管されていました。

協会は「万次郎トレール」というパンフレットを発行し、万次郎が関係した8つの建物を巡る地図と説明を表示しています。ルーニー氏はそれに沿って、丁寧に案内してくれました。日本から贈られた桜が港のそばにありました。心を打たれた建物は「オールド・ストーン・スクール」



です。一教室だけの学校で、16歳の万次郎が幼い子どもたちと共に3Rs(Reading = 読み、Writing = 書き、Arithmetic = 計算)と言われる基礎を学んだといえます。勤勉に学びを続け、後に万次郎は捕鯨、航海術、測量、翻訳などを日本で教えています。

船長の家が老朽化し、取り壊しの危機にあった時、日野原重明氏を发起人とする人々の寄付により、元の1,2階を持ち上げて3階建ての「友好の家」として保存することができました。建物内部は当時のものが保存されていたり、当時の様子が再現されていました。すべてが質実、頑丈な作りです。ベッドカバーにアメリカ文化のキルトがかけられています。日本からも友好の印にキルトが贈られ、展示されていました。



ホイットフィールド船長のお墓にも行きました。このように万次郎ら漂流民に親切をつくしてくれたアメリカ人に感謝するばかりです。お参りも済ませて、捕鯨の基地であったニューベッドフォードに向かいました。そこには鯨博物館があり、そこでも万次郎の写真とともに、「日本は古代から海洋文化、歴史と共存、代々に亘り、深く繋がっている」との展示がされていました。

なお、下のサイトは「アメリカ文化を最初に伝えた人」としてジョン万次郎について、以前に書いたものです。 <http://akiyoshi-madobe.jp/image/2018.03.27e.pdf>